「ハレとケ」通信

第9号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築（9）

「公益財団法人認定記念！ 中津万象園 ～建物編～」

「ハレとケ」のある遊びかた・暮らしかた（9）
【年神様をお迎えする／正月】

中津万象園「花の歳時記」（9）「サザンカ」

かさねの色（9）「梅重」

平成22年12月発行

年末、丸山荘の窓にびっしりとついた雪の結晶。
雪の結晶の形はさまざまで、この日は羽のような形状が美しい。

物語のある建築（9）　修復・維持保全活動　昭和四十六年より

「中津万象園　建物編

～公益財団法人認定記念！～」

中津万象園には、美術館が併設されているのをご存知でしょうか？

美術館には「絵画館」「ひいな館」「陶器館」があり、それぞれに年間を通じて興味深い展示を行っていますが、当園は「丸亀市指定名勝」の文化財。

今なお、ここへそういった現代の建物を建設したことには賛否両論がありますし、当時、建物を建てるに当たっては、やはりさまざまな覚悟や配慮があったものと思います。

では、なぜ、ここに美術館を併設したのでしょう？

それは、「自立した運営が出来なければ、またもとの荒廃した庭園に戻ってしまうのではないか」という心配があったからです。

生き物である庭園は日々の手入れを必要とします。そして、それには莫大な経費が掛かります。

そのことを考えたとき、この庭園が「自分の足で立つことの出来る経営」をすることは必須でした。

そして選んだ道が、「美術館の併設」。

ただし、建てるからには大名庭園に相応しい美しいものを建てなければならない。…その思いから、今の数寄屋風の美術館の姿を選択したのです。

写真上／本館2階から見た園内全景。
写真下／本館入り口の前から見た観月台と邀月橋。
「月を観る」と「月を迎える」、どちらも月に因んだ名前。

以来、この美術館を利用して、山下清、ヘッセ、シャガール、磯崎新、また地元作家、子ども写生大会…と地域の皆さまに愛される展示会を多く開催してきました。

結果的には、「自立した運営」にはほど遠かったものの、そこには、「永く愛され、後世に残す価値のある遺産として認められるには、地元の皆さまに愛され、共に交流を図り地域文化を築くことの出来る、カルチャーコミュニティグラウンドとならなければならない」という思いが込められています。

受付（庭園入口）～美術館、陶器館までの回廊部分

まず最初に見えてくるのが、美術館から園内へ誘う回廊。これは、地元・詫間町の「腕のええ大工さん」の自信作です。梁は固くて腐りにくい、クリの木です。

このデザイン、イメージの回廊は、当社の設計施工の住宅や料亭でも用いられているのですが、京都の都ホテルにインスパイアされて作ったのかなと以前から感じてきました。

…と、その話を当時係わった担当者のかたに話すと、「その通りや、京都まで板金やさんや皆で、見に行ったで。」。いつの時代も変わらず、「美しいと思うものをまねる」のは、建築の基本なのだナと感じます。

ただ、この回廊、施工担当者にはものすごく「宿題」の多い建物だったそう。

例えば、ページ右下の写真を見てください。

写真／左右の庭の変化に連れて、回廊の壁の高さ、位置も変わっていきます。

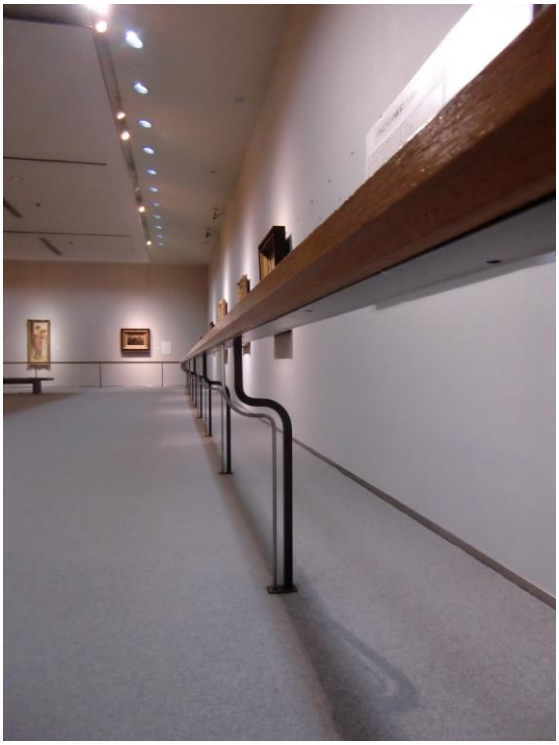
軽やかに仕上げるために、壁の厚さは携帯電話とほぼ同じ幅しかありません。

この薄さに仕上げるために、担当者は工法を四苦八苦。割れてはいけないし、通常の工法では厚みが収まらない。何度も検討を重ねた結果、『秘策』を編み出したとか。

また、美しいリズムで視界を変化させる壁の高さ・位置にも、試行錯誤のあとが。

左の写真の柱を見てみると…。壁の高さを変更したために臍の位置が変わり、もとの穴を埋めた痕が残っています。探してみてくださいね。

美術館（絵画館）



回廊を抜けると、これまた苦労、「宿題」の多い建物だったという、絵画館へ。

「この方がけっこいやろうが。」のひと言で担当者は悩み苦しんだとか。

その苦労の跡はナカナカ私たちの気付かないところだったりするのですが、担当者にとっては、ひとつひとつに思い出があるそうです。（後ページ参照）

そんな中、私たちにもっとも分かりやすい箇所は左の写真にある「波欄間」。

この波欄間は美しくて私も大好きな箇所ですが、道隆寺の波欄間を参考に、ああでもない、こうでもないとカーブラインの切り取り方を考え、また、施工も型枠大工さんの技術の賜なのだとか。

ちなみに、この波欄間、デザインだけでなく、換気口も兼ねています。

（右写真：万象園のために焼いた鬼瓦）

さて、次の部屋は、知る人ぞ知る（？）貴賓室。今はイベントなどの際の控え室として使われています。

当社の2階には、侘びた渋い和洋折衷の応接間（こちらも知る人ぞ知る）があるのですが、この貴賓室は同じ和洋折衷でもずいぶんと華やか。とりわけ、赤い漆の塗られた飾り棚、菱の形の格子の建具は、「素敵だな」と感じる場所です。（天井のお花の花芯は…。なんと、空調になっています）。

お家の応接間にも、似合うかもしれませんネ。

観月台（絵画館）、本館・懐風亭

美術館から池へ乗り出す形で作られた、「観月台」。ここから鯉にエサをやることもできます。

開けた空間が気持ちよく清々しいこの観月台にも、またまた沢山の苦労とコダワリが。

まず、池の中に基礎を作ることが難しく、施工担当者はかなり悩んだとか。さらに、天井は、竹と葭を一本一本編んだもので、外部の銅板葺の屋根の勾配と、階部の天井の勾配の角度には微妙な差があります。

美しさを追求した結果そうなったのですが、そのため、内部の天井を吊るような構造となっており、これもまた苦労をしたといいます。

そして、ここから眺めたとき正面に見えるのが、受付のある本館と、懐風亭の建物。

実はこの建物の屋根の棟の熨斗瓦、最初は今よりも一枚高かったのだとか。

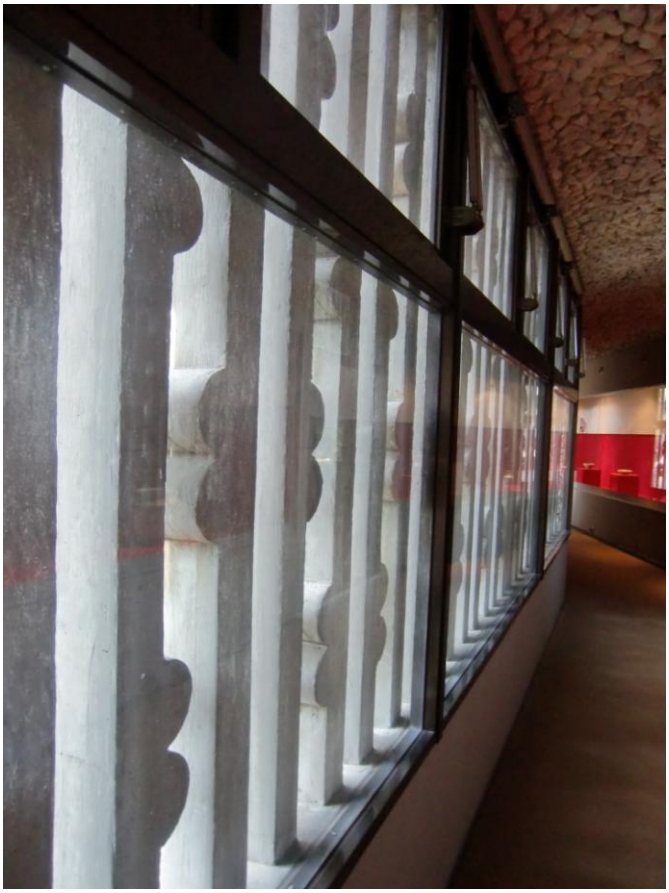
一旦熨斗瓦を葺いたあと、瓦職人さんと弊社の社長とが、二人でじっと「どうや？けっこいか？」と眺めていたとき、最後に社長が「なあ、やっぱり高いと思わんか？」と漏らしたのだそうです。

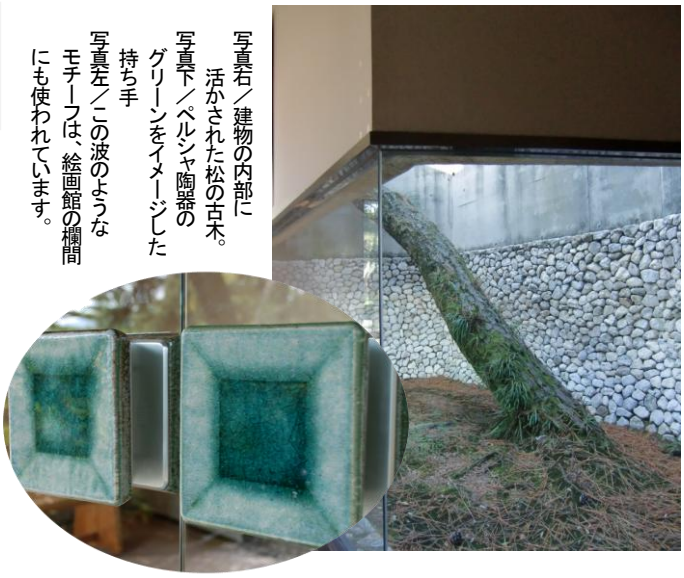
そして、翌日。

当社の社員が万象園へ出てきたときには、なんと、すでに瓦が一枚減らされていました。「除けろ」とは社長は言わなかった訳ですが、早朝にやってきた職人さんは、自分から綺麗に一枚除けてしまったのです。

考えてみれば、一旦葺いた瓦を除けさせるなんて、ずいぶんと勝手な話…かもしれませんが、二人が、「ベストじゃない」ということに耐えられないほど、真剣に誇りを持って仕事をしていたことが伝わってくるようなエピソードです。さすが職人魂！？

陶器館





写真右／建物の内部に活かされた松の古木。
写真下／ペルシャ陶器のグリーンをイメージした持ち手
写真左／この波のようなモチーフは、絵画館の欄間にも使われています。

美術館を出ると、次に見えてくるのがペルシャ陶器、ガンダーラ仏などを収蔵した「陶器館」。

この建物は、生えている松を取り込んだ形で設計された建物で、外壁も内部の天井も、白い自然石を積み重ねたデザインとなっています。（施工方法は後ページ参照）自然の素材のおかげで、ご覧の通り、松林の背景にもしっくりと馴染み、まったく違和感がありません。

また、扉の持ち手に使われているのは、ペルシャ陶器をイメージしたグリーン。このグリーンは、丸亀プラザホテルの外壁の色にも使用しています。

松の古木の向こうに見え隠れする陶器館。白砂青松、まさにその言葉にぴったりの光景と思っています

代笠亭（だいりつてい）

邀月橋を渡ると見えてくるのが、「代笠亭」。これもまた、軽やかに華奢に作られたあずまやです。ずっと万象園の建築に係わってきた当社の本部長曰く、「ひょいっ、と持ち上げられそうやろう?」。

この建物は芝生の中に佇んでいるのですが、ときどき、「江戸時代に芝生ってあったん?」と聞かれることが。そこで調べてみると…。なんと、平安時代に書かれた造園書、「作庭記」にも登場しているとか。平安の昔から芝生が親しまれてきたなんて、驚きです。

また、この代笠亭という名前も、風情があって面白いナと感じませんか?

京都の東本願寺下屋敷の渉成園にも代笠席という名前の茶席があるのですが、これは、「人里離れた地を訪れた旅人が傘がわりに雨宿りする席」と考えられているそうです。

万象園の場合、芝生の中にあるから。『野点傘』の代わりということかな?…などと考えるのも楽しいですね。

※園内にある茶室のうち、母屋・観潮楼以外は一般公開する際に「新築」されたものなのですが、名前は古図、文献に残っている、「昔は万象園にあった茶亭」の名前に因んでいます。

また、いま現在あるもののほかにも、まだ復元されていない茶室もいくつかあります。資料が見つかれば、復元の可能性もあるかも!?

園路からは松林で隔てられた芝生の億にある、代笠亭。

春には桜が満開となるほか、メタセコイア、タイサンボク、イチョウなど、彩りのある木がここには集まっています。また、小さな牡丹園も作られています。

目の前に広がる広々とした芝生では、結婚式のセレモニーが行われることも。

神楽舞や鏡開きも絵になる光景です。

観潮楼、母屋（茶室）

上段左：観潮楼でのお茶会。（床の間のしつらえ）　／　上段右：大名気分でお茶を一服。お庭を独り占めです。（写真：セーラー広告㈱））

下段左：母屋の床の間。円窓から光が入り、なんとも言えない色気を感じさせます。
下段左：母屋の正面が、「舟着」。ここへお殿さまは舟を着け、園内へ遊びに訪れたのでしょう。　（写真：セーラー広告㈱）

前回の「ハレとケ通信」で、修復の様子や歴史的な背景をご紹介致しましたので、今回は、実際に使っている姿を御覧下さい。

まずは、「観潮楼」から。障子を開け放ったときの開放感は、清々しい気持ち良さです。

今のお茶会のスタイルで使おうとすると、水屋が丸見えになるなど不便な点もあるようですが、この景色を眺めることが出来るなら、そんなことは吹き飛んでしまいますよね。

前回も書きましたが、ここは「お前茶の席では？」との指摘のある場所。でも、残念ながら、まだお前茶の席は持ったことがありません。いつかぜひ、楽しんでみたいものです。水面に月が映る頃、夜のお茶会…なんていうのも素敵ですね。（観潮楼は老朽化のため、通常は立ち入りをご遠慮いただいております。見学希望の方はお声がけください。）

そして、八畳六畳の続間の茶室が、母屋と呼ばれる茶室です。ここの床の間はおおらかで美しく、円窓の前にお客さまが居並ぶ様は「絵になる」のひと言！

わたし自身も、年に2～3回程度、茶道の先生にお願いして、「男性のための茶事入門」を行っていますが、やはりこの場所ならではの風情があるものです。また、障子の向こうに見える笠松は、おとぎ話の山のよう。

こちらのお茶室は日曜、祭日を中心にお抹茶をお出ししている他、一般のお茶会などへもお貸ししています。ぜひ、この「絵になる」空間で、お茶をどうぞ！

魚楽亭、筆海亭、弁天さまなど　園内構築物あれこれ

もともと園内には、今よりも多くの茶室があったのではないか、と言われている万象園。その中で、開園後復元されたあずまやが、「魚楽亭」です。（写真左）

丸亀藩京極家琴峯侯（六代目藩主高朗侯の号。七代の藩主のうち、高朗侯のみ丸亀に墓所があり当地を深く愛したお殿さま）の詩集にも登場するもので、母屋・観潮楼を池越しに、ちょうど正面に観ることの出来る絶好の場所。

ここはキショウブ、ヒツジグサなどの花の咲く場所でもあります。これまでご紹介した建物は銅板葺きの屋根が多いのですが、これはこけら葺。桧の皮で葺かれているため、古びていく様子も日本画の世界のようでなかなか良いものです。とはいえ、そろそろ葺き替えも…。

←晴嵐の島にある、筆海亭。

晴嵐とは、「晴れた日に山にかかるかすみ」「晴れた日に吹く山風」のことを言うそうで、この名前からは自然と、風が吹いて松の枝の揺れる様を想像します。

ちなみに、そういった「風に揺れる松の枝の音」を「松籟」と呼び、その言葉はまた、茶の湯では、釜の湯の煮え立つ音をも意味します。

茶亭の名前の「筆海」とは、詩、また、硯のこと。夏の暑い日、風の音を聞きながらここで詩を作るお殿さまの姿が見えてきそうな建物です。

←池泉回遊式の蓬莱庭園の要となる蓬莱島に当たる、「鐘の島」。

ここには、不老不死の伝説の薬と言われる天台烏薬の木が植えられ、京極家祖先伝来の地、近江の竹生島から分祀したという弁天様が祀られています。

大名庭園にとっては心臓とも言える、この弁天様の整備の際には、当社の協力業者の皆さまの多大な協力があり、その名前も石に彫り込まれています。

また、茶室の裏側にある稲荷社の鳥居復興の際にも同じく奉賛会を立ち上げ協力をいただき、そのお礼の碑が鳥居の前には立てられています。

万象園、中津の浜の写真を探しています！

中津万象園の中長期的な将来計画を策定するに当たり、昔の資料（明治～昭和 40 年頃）を集めています。

記念撮影、スケッチなど何でも結構です。

お手元に懐かしい写真、絵はございませんか？

「あるよ！」という方、どうぞ真鍋までご一報ください！

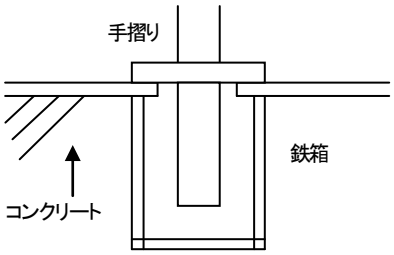
TEL0875-83-2588／mail: manabe@fujikensetsu.jp

マニアック?! 納得!? 「この方が、けっこいやろ?」から生まれた、細かなコダワリの数々をご紹介致します。

美術館の施工担当者・尾崎の語る、「こだわり」ポイントあれこれ

（現・富士建設（株）本部長）

この手摺り、どうやってつけたん？【絵画館】

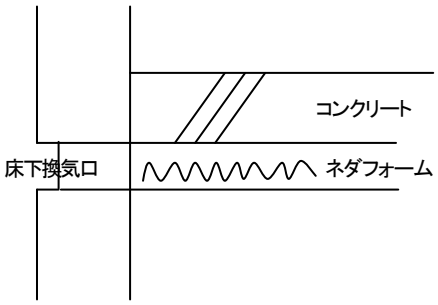


言われないと気付かない…という本当に細かな点なのですが、実は、絵画館の展示室のカーペットには、継ぎ目がありません。

ふつう、手摺りを付けるためには、手摺りの足下には、カーペットの継ぎ目が来るものですよね?ですが、それがないのです。

ということは、つまり…。そうです、「カーペットを貼ったあと、手摺りをつけた」のですね！うーん、手間がかかってます！

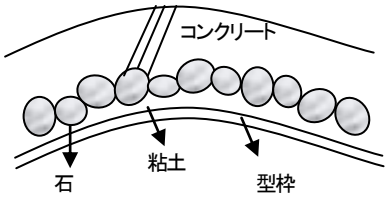
実は、床下に換気口が。【絵画館】



「たぶん、誰も知らないんと違うか?」と尾崎の語る、絵画館の床下換気口。湿気を室内に上げないために、土間の上にネダフォームを敷き、そこから床下換気口へ湿気を逃がし、さらにその上にコンクリート。

建物の耐久性を上げることと、美術品の保管のための構造です。

どうやって石を貼り付けたん！？【陶器館】



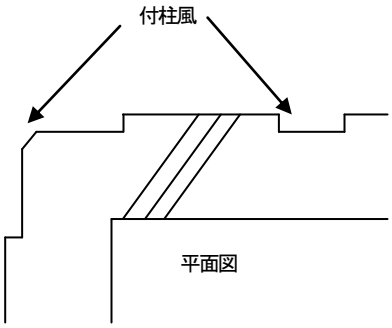
陶器館へ入ると、天井も壁も、すべて石積み。特に天井については、「どうやって貼っているの?」と疑問に思われる方も多いのでは?

実はこれ、上図のようにして施工されました。つまり、まず、型枠の上に粘土を敷き、石を押しつけて埋め込みます。そしてその上からコンクリートを流し込み…。

最後に、水で粘土を洗い流して、完成、です。なるほど!

外壁の打ちっ放しの角、実は…。【絵画館】

絵画館の外壁。何気なく見過ごしてしまいますが、実は、こんなコダワリが。まず、和風調にするために、コンクリートの凹凸を利用して、付け柱・付け土台風に仕上げています。また、漆喰の雰囲気を出すために塗装仕上げとし、コンクリート打ち放しの上から、下地調整としてパーライトモルタルを3㎜（！）という薄塗りで重ね、塗装をして仕上げています。



「ハレとケ」のある　遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。（9）

【年神様をお迎えする／正月】

『お正月』と聞くと、年末に慌ただしく新年の準備をしているところを思い描いてしまうのですが、本来なぜ『お正月』にいろいろな飾り物をするのか、その理由をご存知ですか？

正月とは本来、『年神様（としがみさま）』をお迎えし、お祝いする行事のことをいい、一月の別名でもありました。現在では一月一日から三日までを『三が日』、七日までを『松の内』あるいは『松七日』と呼び、この期間を『正月』とするのが一般的です。

『年神様』とは、その年の五穀豊穣と、家族みんなに幸せをもたらす神様とされ、元旦の日の出とともに高い山から各家にやってくる、新年の神様ともいわれています。

昔、亡くなった人の魂は田畑や山の神になり、正月には年神様となって、子孫の繁栄を見守ってくれるのだと考えられていました。つまり年神様は、祖先の神様でもあり、農耕の神様でもあったのです。

そんな年神様をお迎えするために用意するのが、正月の飾り物というわけです。門松は年神様が降りてくるときの目印であり、鏡餅は年神様の拠りどころ、お供え物だったようです。家の玄関につける注連縄（しめなわ）は、家の中にもやってきてくれるようにと飾ります。

正月は、日本の行事の中でも最も古くから存在し、仏教が伝来した六世紀半ば以前より存在していたともいわれていますが、その起源については、詳しく分かっていません。現在のような、門松や注連飾り、鏡餅などを飾るという風習が浸透したのは、江戸時代、庶民にも手軽に物品が手に入るようになってからのようです。

毎年飾っている門松や注連縄ですが、なぜ飾るのかについては、意外と知られていないように思います。今年の年末には、年神様へ感謝を込めて、門松や注連縄を飾ってみてはいかがでしょうか？

◆初日の出◆

初日の出と一言でいっても、時間帯、空模様によって呼び方が違っています。あなたはどの空が好きですか？

・初茜（はつあかね）
　…空が暗い赤に染まりはじめる
・初東雲（はつしのめ）
　…雲があけぼの色に染まり始める
・初明かり（はつあかり）
　…太陽の光がほのぼのさしてきた、この瞬間が初日の出

◆初水（若水・福水）◆

初水とは、新年に初めてくむ水のことをいい、飲むと一年の邪気を払うといわれています。きれいな新しいグラスでくめば、ペットボトルや水道の水でも初水となります。これを沸かし、福茶や雑煮に使うと、一年を健康に過ごせるそうです。

○福茶の作り方○

材料（湯飲み一杯分）
・塩昆布または昆布の佃煮　…　二枚
・梅干　…　一個
・福豆（節分等に使う豆）　…　三粒

☆湯のみに材料をすべて入れ、熱々のお湯を湯のみに注ぐだけ。（お湯を前茶にしてみてもおいしそうですね。）

◆初詣のお作法◆

その年の吉方向にある社寺や地元の神社へ、新年に初めてお参りする初詣ですが、その参拝のお作法をご紹介します。

Point 1	まず神社に着くと、大きな鳥居が目には入ってきます。この鳥居は、『ここから向こうは神の領域ですよ』というしるしですので、会釈してくぐります。
Point 2	鳥居をくぐると手水舎（てみずや）に行き、ひしゃくを右手に持って水をくみ、左手にかけてから、持ちかえて右手にもかけます。その後また右手に持ちかえて左手に水を受け、その水で口をすすいでから再び左手にかけます。最後にひしゃくを立て柄を洗います。一杯の水で両手と口を洗い、残った水でひしゃくも洗ってしまうという、とても合理的で水を無駄にしない清めです。
Point 3	参道は神様が歩く道です。真ん中ではなく、両端を静かに歩いたほうが神様に喜ばれるかも。
Point 4	本殿まで行きついたらお賽銭を投げ入れます。「ご縁」とかけて5円をささげる人、「始終ご縁があるように」と45円を入れる人などさまざまです。
Point 5	鈴の緒を両手で持ち3回鳴らして鈴祓え。清らかな音で邪気をはらい、聞いて下さい！という合図を神様に送ってくれます。
Point 6	二拝二拍手一拝。2度おじぎをして、拍手（かしわで）を2回打ち、願いごとをします。最後にもう一度深くおじぎをします。

※参考資料「もっと！ 暮らし たのしむ なごみ歳時記」

『初詣』、『初売り』と、まだまだ『初』のつく行事はたくさんありますが、新しい年の始まりを大切な人たちと楽しく迎えられることが一番ですね。素敵なお正月をお過ごしください。

（文・土岐倫子）

中津万象園

「花の歳時記（9）サザンカ」

師走を迎え日ごとに寒さが厳しくなって来ますと万象園の多くの植物は活動を鈍らせ、じっと春の到来を待っています。

この寒さに身を引き締めながら、万象園西南部の茶室路地から西方へ歩を進めてください。

すると、俄然我が目を疑うような光景が視野に展開します。園路の左右に植栽されているサザンカの花が見事に咲き乱れ、桃紅色の花のトンネルを作って私たちを迎えてくれているではありませんか。真冬とは思えない花いっぱいに覆われた別世界に、「この世の極楽」と、きっとご満悦されることでしょう。

サザンカは日本の西南暖地（沖縄・九州・四国西南部）に自生している野生のサザンカを祖先として、江戸時代から各地で品種改良が重ねられて沢山の品種が作られました。それらの中で最も多く栽培されているのが、皆さんの前に咲いているカンツバキであります。このカンツバキは花の形状はサザンカに似ていますが、花色が桃紅色の八重咲きであることと、開花時期が遅い（12月～3月）等がその特性とされています。

ところで、ツバキとサザンカは別の種類であると思っておられる方もあるでしょうが、植物分類上は共にツバキ科・ツバキ属に属しており、この両者は血を同じくした兄弟であり、これをはっきり区別しようとすること自体が無理ではないかと思います。

このことは名称の由来からも察することが出来ます。サザンカの和名は漢名の山茶花「サンサカ」が訛って「サザンカ」となりましたが、中国では漢名の山茶花はツバキを指しています。

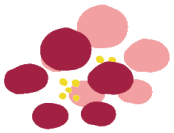
＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路　坂出北ICより約 8.5km／約 15 分
坂出ICより約 14km／約 20 分
高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分

【長岡　公　氏】
昭和 2 年 10 月　香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和 26 年 3 月　鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和 26 年 4 月以降　香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校
・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校
・飯山高等学校教頭
昭和 63 年 3 月　定年退職　香川西高等学校教頭
現　在　（財）中津万象園保勝会　理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林・玉藻編／中・西讃編）がある。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色（9）「梅重」

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういったものの結晶とも言える「重色目（かさねいろめ）」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。



表：濃紅／裏：紅梅
着用時期は十一月より二月まで。
梅花の重なり合う様子を配色に表したもの。表地に濃紅を配するものは紅梅の花をモチーフとしているよう。

【編集後記】　皆さまは、いったいどんなときに冬の訪れを感じますか？葉の落ちつくした木々？スーパーに並ぶ食材？朝、布団から出る辛さ？

…色々ありそうですけれど、私の場合、お茶の稽古で「筒茶碗」が出てくると、冬を感じます。筒茶碗とは、お湯が冷めないように口径が狭いお茶碗なのですが、客にできるだけ熱いお茶を出せるよう、点前も工夫されています。「茶道」というと、堅苦しいイメージをお持ちの方も多いと思いますが、茶の湯にはそういった客への繊細な心づかい、季節の楽しみ方が数多くあるのですネ。それを知ることは幸せですし、湯のたぎる音も、気持ちを落ち着かせます。

そして、冬の恒例行事といえば、笹ヶ峰への山行と、五台山竹林寺への初詣。山登りが趣味の私ですが、笹ヶ峰は大好きな山の一つ。毎年山小屋へ宿泊しますが、深夜に降り積もる雪、山守さんの用意してくれる豆炭アンカ、薪ストーブの煙、窓に凍り付いた美しい雪の結晶（表紙写真）は、心に染みる光景です。

その風情を愛しく思うにつけ、季節を楽しめるそんな素敵な光景を、いったいどのくらい、私たちは後世に残せるのかな?と考えたりも致します。

**********御意見、御感想をお聞かせ下さい**********

建設業許可：香川県知事許可（特 18）第 189 号／一級建築士事務所：香川県知事登録 第 416 号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第 1997 号

FUJI

富士建設株式会社

本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588（0120-832589）
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail　y-manabe@fujikensetsu.jp　（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において 1300 区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処　懐風亭